

第十九話 お婆さん

ドアが開き、隣の部屋の中から杖をついたお婆さんが出てきた。「お客さんかね。今日は人が来るとは聞いていなかったんだがね」。そう言っただけで「のら」の顔を見た。さらにお婆さんは視線を窓の方に向けた。そこには「マナ」の驚いた顔があった。

『マナ』も部屋の中に入り、お婆さんに謝った。お婆さんはニコニコして、特に気にしている様子もなかったが、不思議そうな顔をして、「お前たちはどうやって川を渡り、ここに来たんだね」と尋ねた。すると『のら』は、『カッピ』、『カッピ』と言って、プカプカ浮かぶ『カッピ』のマネをした。『マナ』は慌てて、『カッピ』という友達に川を渡る手伝いしてもらってここに来ました」と付け加えた。お婆さんは、「そうか」と言っただけで考え込んだ後、「お前たちは、まだここに来るのには早いようじゃ。これを持ってお帰り」と言っただけで、小さな包みを『のら』に渡した。『マナ』は不思議に思ったが、あまり立ち入ると失礼と考え、帰る支度を始めた。傍らの『のら』は不思議そうにお婆さんを見ていた。それに気が付いたお婆さんは、『のら』の顔をジッと見ながら、「頑張んなさいや」と言っただけで、頭を軽く撫ぜた。『のら』はニコッと笑って答えた。

帰ろうと家を出る時、『マナ』はお婆さんに尋ねた。「ここに来る途中の花畑は、お婆さんが植えたんですか」。するとお婆さんは、「そういう訳でもないんだが、あの花は、ここに来る人を迎える為に、何時も綺麗に咲誇っているんだよ。私は毎日花を少し摘んで、家の裏手に飾ってやっているだけさ」と言った。『マナ』は不思議に思ったが、「お世話になりました」と伝え、その場を後にした。外は日が暮れ始め、薄暗くなってきた。

